

# シュローカ・ヴァールティカ「文章論」の一節

## 「文章無部分説」批判について

山崎 次彦

クマーリラのシュローカ・ヴァールティカの「文章論」<sup>(1)</sup> *vākya-adhikaraṇa* と名づけられる章の第一一詩から第一四〇詩にわたって、ニャーヤ・ラトナーカラ（以下 NR と略記する）に於て、「文章無部分説」*nirbhāgavākya-vāda* の批判が展開されている。この説に関して、英訳者 G. Jha<sup>(2)</sup> はスポータ説 *sphoṭa-vāda* と解しているが、NR では「自体論者」*svabhava-vadin*、或は「文典派の人々の説」*vaiyākaraṇair…uktam* とあるのみで、スポータ説の語は見当らないようである。しかし、内容から見て、ここで言われる「文章無部分説」とは、スポータ説を指すと考えて概ね誤りはないであろう。この説に関するクマーリラの理解とその批判とをあとづけて見ようと思う。

NR が「文章無部分説」と註した主張を、クマークラは詩頌の中で、どのように表現しているか。最も基本的な内容を

表わしていると思われるものを拾い出して見る。

文章の意味を表わすものは、文章である。——*vācakam vā-*

*kyam vākyarthasya…(111b)*

これは文章の意味を知らしめるものは何か、の設問に対する一つの立場を直截に表現したものである。文章の意味を顕するものは文章である、という主張は、文章スポータ説の立場である。ここでは、音声がスポータとしての文章を開顕し、この「文章」が文章の意味を開顕する、と考える。

文章は文章の顕現である。——*vāyanirbhāsa vākyam…(118a)*

ここに、顕現され、知覚の対象となつた文章の背後に、文章自体の存在が想定されていることを表わしている。それは「語そのもの」*「語自体」* *śabdātīva, śabdātman*<sup>(3)</sup> と言われるスポータとしての「文章」と見ることが出来る。この「文章」の顕現したものが、いわゆる文章であり、またそれが文章の意味を表わし、知らしめる、というのであろう。マード

ブの「全哲学綱要」(以下 SDS と略記する)では、「スポータとは字音とは別のものであり、しかも字音によつて顕現され、そして意味を理解せしめる常住の語である。——とスポータ論者達は語る。」と説いている。

文章と文章の意味とは一で、外のものである。——*vākya-vākya-rhāyor aikye bahyā*…(119b)

NR はこの詩について、「古典派の人達は、文章と文章の意味とは全く外のもので無部分だ、と考える。」と釈している。これによると、詩にいう「*ī*」*aikyam* とは「無部分」*nirbhagam* の意味である。「無部分」に関しては、SDS に「無部分なる常住の語」——*niravayavo nityah sabdo*、としてスポータを説き、また文章スポータ説を取るバルトリハリのヴァーキヤパディーヤ(以下 VP と略記する)では、「あたかも字音の中に部分が存在せざることく、単語の中に字音は存在せず。単語が文章より分離して存在することは、絶対に有りえず。」(傍点筆者)——*vākyaṭ padānam atyantam pravieko na kascana* (I.73) と、字音や単語の独立の存在性を否定している。これは文章の無部分性或は不可分割性を説いたものといえる。「外のもの」に就ては、NR は何の説明も与えてゐないが、VP には、スポータは音声 *dhvani* の中に顕現 *prakāśa* するだけびあつて、それ自体がそこに生起 *sambhava* するのではない、と説いている (I.100, 101)。これによつて考

えれば、スポータとしての「文章」そのものは、直接にわれわれの知覚の対象になりえない、という意味で「外のもの」または超越的と考えられるし、或は知覚の対象となるいわゆる文章に対して、スポータとしての「文章」は「外のもの」と言うこともできよう。

以上によつて、NR のいう「文章無部分説」とは、文章はスポータとしての「文章」の顕現であり、文章の意味はこの「文章」によつて表わされること、「文章」は「語そのもの」「語自体」として部分を有せず、且つ主観に対して超越的で、文章に対しては「外のもの」であること、を主張する立場ということになる。この「文章無部分説」へのクマーリラの批判は、以下に見られるように、主として、その「無部分性」に向けられる。

クマーリラは、まず「文章」の認識根拠を問題にする。SDS では、古典派の人々はスポータの認識根拠を直接知覚 *pratyakṣa* に求める、としているが、ここでは、それには触れない。

文章というこの観念によつては、(単語等から独立の文章)自体は認められなく。——*vākyam ity anavā buddhyā na cātmāṃśai pratyakṣe* (118b)

といい、次の詩では、「文章の意味という観念によつても、



āvāpauḍvāparacanābhedād vākyaṣu anantata. (121)

単語の表現しうる意味は、極く限られたものである。しかし、これらの単語が互に結合、排除して作る変化にもとづいて、無限に多様な文章をつくりうる。そこで、もし単語から独立の無部分なる文章を認めるときには、そのような無限の文章に対して、一々「文章」の存在と、その無限の表現力とを許さねばならなくなる。

(文章の)意味が(単語の)僅かな力によって生ぜられるとき、

(文章にそれぞれの意味を表わす)多くの力(を想定すること)には、何の認識根拠もない。ゆえに、文章とその力の無限性については、何の義準量もなす。——stokasaktyupapanne 'rthe ba-huśaktyapramāṇatā, vākyaśacchakty-anantatave nārthapattis tato bhavet. (122)

NR はこれについて、——文章無部分論者は現に知覚されていながら無限の文章と無限の力—*anantāni vākyaṅyanupalābhyamānāni śacchaktyaś ca-anantatā*—を想定し、自体論者も、未だ見られていない無限の力—*śaktyānāmyam aḍṛś-tam*—を想定している、と説いている。詩は、そのように想定された「無限の文章とその表現力」に、何の根拠もありえないことを明かにしたのである。

(3) 単語や字音がなければ、(文章の音声による)表現の差別もなす。——*na ca vyañjakabhedo 'pi padavarṇādrite 'sti te-*

(135a)

この詩はバルトリハリの

声音が順序をとって生じたるものなるが故に、それ(＝スポータ)は前もなく、後もなし。順序なきものが順序の相を取るにより、あたかも差別あるかのごとく知覚せらる。(VP. I. 48)。

あたかも(実物の存する所とは異なる)他の所に存する映像が、水の動揺により、その水の動きに即応するかのごとく見ゆるも、その関係はスポータと声音にも存す。(VP. I. 49)。

等の詩に見られる、顕現されるスポータ自体は「順序なく」「無差別」であるが、それを顕現する音声 *nāda* の異なるに順じて、異なる相を取って表われる、と言う主張を予想しているものと思われる。クマリーラはこの主張に対して、音声による表現の差別といつても、その音声は字音や単語の音声なのであるから、それらの字音や単語の存在を認めない限り、音声による表現の差別もありえない、といったのである。さらに、同じバルトリハリの主張を予想して、

諸音声による差別と順序があるととしても、(無部分なる文章において)表現さるべき対象(に差別と順序)がないのであるから、それら(諸音声)が(差別と順序を)表わすことは全く成り立たない。——*sator ap ca nādanām pṛthakvākrāmavattva-yoh, vyañgyā 'bhāvena naivaśam abhivyaktiḥ prasidhyati.* (137)

と。先の詩では、字音と単語の存在を許さなければ、音声による表現の差別はありえない、といわれたが、ここでは、文章そのものが、無部分であり、したがって差別も順序もない以上、音声に差別も順序がありえても、それによる文章の差別、順序をいうことは、全く不可能である、といったのである。

(4) 同じように、音声の差別と順序が文章に差別と順序の相異をもたらず、という主張を前提として、それを認めるとしても、音声は「微細なものであるから」*sūksmatvāt*、

それら(諸音声)によっては、そのよりな(微細な)もの以外の結果をうることはできない。ゆえに、ただ語の極微の部分のみが知覚されるのであろう。— *na ca karyāntarā 'rambhas tais tadīg upapadyate, tenā 'numātrasābdamśagrhitih kevalā bhavet.* (136)

と。音声は「微細なもの」であるという点に関しては、VP に、

常に作用ある語は、微細なるが故に、知覚せられず。あたかも燭ぐことによりて、風が知覚されるがごとく、その(語)は自己の機会因にもとづいて知覚せらる(117)。

という説が、異説として挙げられ、フニャラーヂヤの註によると、ここに「微細な音声」*sūksmo dhanih* が説かれてい

ハリの主張を批判しているとはいえない。

(5) (文章無部分説に立てば、文章)全体の認識が同時にあるか、或は全くないかの何れかであろう。— *kṛtsnasya yaugapadye-na bhaved vā 'vagarit na vā.* (138a)

(6) (例えば、*gauh*—牛がいる。—という文章は)これだけで完全な文章であるが、他(の *suktah*—白い—の語)を要するものとしては、不足である。これは矛盾である。区別のない(同じ文章)に、不足と完全とを考へることはできないからである。—*tadeva sakalam vākyaṃ nyūnam anyad apekṣya ca, tad viruddham, na cā 'bhine nyūnasakalyakalpanā.* (139) それぞれ実在として認められつゝ三語(から成る文章)が四語(から成る文章)の中に存在しない。ともし考へるならば、そのときには、木は森の中に存在しなごであろう。—*prithakpra siddhasadbhavaṃ tripadam ca catuṣv pade, nā 'stihī yadi kalpyeta vīkṣo na syāt tadā vane.* (140)

後の詩に「*gauh* NR は

*gām ānayo śuklām.*—白牛を連れて来ご。

*Devadatto gām ānayo śuklām.*—ゾーマッタが、白牛をつれて来ご。

の例文を挙げて、この二つの文章がそれぞれ無部分で一なるものであるとすると、前者が後者の中に、部分として存在するということはない。このことは、木はそれ自体完全な存在であるのに、森の中に木がない、という不合理と同様

ひある」ところ。

もし(二)の文章は)それぞれ別個に成じ、誤りがなごのひあるから、(互に)別の文章ひある」とするならば、全く同じである。単語と字音とは文章から別のことぢひある。 — pīhakraśīddhyamitihātvāt syād vākyañtaratā yadi, vākyaś ca bādantaratvaṃ syāt tathaiiva padavarṇayoh. (141)

先の例文がそれぞれ独立の文章であり、かつそこに何の誤りもない。したがって、両者は互に無関係な別個の文章であつて、前者が後者の部分を成すという関係はありえない。これが先の詩に述べられた論難に対する救釈である。詩は、それが認められるならば、単語と字音とは文章から無関係な別のことぢひなる」と再びそれを拒けたのである。

以上で、文章無部分説を認めた場合の過設の指摘が終つて、次に部分の實在の主張が展開されてゆく。

- 1 Kumārīla Bhaṭṭa; *Ślokaśāntika*, *The Chowkhamba SS. 2* 拙論「マレーラの『文章論』」(三重県大研究年報'一九七〇年)参照。
- 3 *Bibliotheca Indica*, *New Series*, No. 965, p. 505.
- 4 中村元「ジュウの形而上学」二九〇頁以下参照。
- 5 *SDS*, XIII, 1. 193 etc. 中村、前引書二二三頁。
- 6 *varṇāntarikto varṇahivyānyo 'rthapratyāyako nityaḥ śabdah* (XIII, II. 135-7) など、メメータ説に関する VP. *SDS* からの引用は全て中村博士の前引書における訳文を拝借した。

深へ謝意を表す所也。

- 7 *Ye 'pi vaiyākaraṇā bhūyam eva nirbhāgam vākyaṃ vākyaṅkārṇam ca manyante...* (p. 879)
- 8 *SDS*, XIII, 1. 113.—sphoṭakhyo nityaḥ śabdō.
- 9 中村、前引書二七五頁。
- 10 中村、前引書二七八頁' *SDS*, XIII, 1. 127ff.
- 11 *NR*, p. 880; *vaiyākaraṇair niravayavatte 'pi vākyaṅam avayavapratiḥāse 'vayavapratyahihāyāṃ ca sādrśyaṃ kāraṇam uktam...*
- 12 中村、前引書二九二頁以下。
- 13 Cf. *NR*, p. 880; *stokair eva padais tadarthais cānantāni vākyaṅi tadarthas cā "rabhyate...*
- 14 *NR*, p. 880; *tatra nirbhāgavādina yāvan artham anantāni vākyaṅy anupalabhya mānāni tac chaktayaś cā 'nantāḥ kalpyatāḥ, svabhāvavādinō 'pi śaktyañantyaṃ aśīstān eva kalpyam.*
- 15 *nādaya kramaśāntavān napūrvō nā paraśca saḥ, akramaḥ kramarūpeṇa bhedavān iva gṛhyate.*
- 16 *pratibhambam yathānyatra sṛtiṅam toyakriyāvāśāt tatpravyūttim ivānveti sa dharmah sphoṭanādāyāḥ.*
- 17 中村、前引書二七五頁。
- 18 *aiśvaravṛttir yaḥ śabdah sūksmatavān nopalabhyate, vyāñjanād vāyur iva sa svanimitatī prauḥyate.*
- 19 中村、前引書二六九頁。